



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ルクセンブルク語の音韻記述 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	西出, 佳代
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11177号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55613
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Kayo_Nishide_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士 (文学)

氏名： 西 出 佳 代

学位論文題名

ルクセンブルク語の音韻記述

本論文は、ルクセンブルク語 (lux. Lëtzebuergesch) の音韻構造を実験音声学的なデータを交えながら体系的に分析し、同言語の共時的な音韻規則と通時的な音韻変化について考察を行ったものである。ルクセンブルク語は 1984 年の言語法によって、ドイツ語西モーゼルフランケン方言 (dt. Westmoselfränkisch) から言語の地位へと社会的に昇格した拡充言語 (dt. Ausbausprache) である。ルクセンブルク大公国はフランス語、ドイツ語、ルクセンブルク語を公用語とするが、ルクセンブルク語は同国で唯一の国語 (dt. Nationalsprache) として認定され、推定で約 40 万人の話者を有すると言われている。

第 1 章では、ルクセンブルク語をめぐる社会言語学的側面を取り上げている。中世以来の文献の伝統、19 世紀以来の近現代文学と言語擁護、『ルクセンブルク語辞典』(dt. *Luxemburger Wörterbuch*, LWB 1950-77) に代表される辞書編纂史、政治的事情と領土の変遷、方言区分と標準ルクセンブルク語の成立などについて、簡潔ながら正確に言及している。

第 2 章では、ルクセンブルク語の正書法の歴史と現在の正書法の骨子を総括している。ルクセンブルク語の正書法は上述の LWB による 1975 年の正書法を改訂した 1999 年の現行制度が行われているが、西出氏は独自の発音表記を併記して、具体例を挙げている。

第 3 章は、西出氏が行った現地での録音調査について、協力を得た 10 名の生え抜きのインフォーマントと分析に援用した音声解析ソフト Praat の解説にあてている。

第 4 章は、標準的なルクセンブルク語の音韻構造の分析である。まず、西出氏は上述の音声解析を通じて、母音については、ルクセンブルク語の代表的文法書である Schanen, François/Zimmer, Jaqui (2006b): 1, 2, 3, *Lëtzebuergesch Grammaire — 3 l'orthographe* (Esch-sur-Alzette) の発音表記が次のように修正されるべきであると主張している (「Schanen/Zimmer (2006) > 本論文の表記」の順): /œ/ > /è/, /ɛ/ > /æ/, /a/ > /ɑ/, /ai/ > /ɑi/, /ɛi/ > /æi/, /ei/ > /ɛi/, /au/ > /ɑu/, /ɔu/ > /æu/, /əu/ ~ /ɔu/ > /ëu/. また、同書が 8 つの二重母音に加えて、/ɔi/ (例 lux. Moien, dt. Morgen) という二重母音を認めているのにたいして、これを /ɔ/ + /j/ の組み合わせとして退けている。一方、子音については、発音記号を付したほとんど唯一の辞典である Zimmer, Jaqui (2008): *9000 Wierder op Lëtzebuergesch* (Editions Saint-Paul) に記載されている硬口蓋摩擦音 /ç/, /j/ をそれぞれ歯茎・硬口蓋摩擦音 /c/, /z/ として記述すべきであると主張し、歯茎・硬口蓋音と軟口蓋音の音素と異音の関係を /g/, /z/ (→

[y]/[ε]/[x]/[j]), /ε/ (→[x]) として捉え直す提案を行っている。

第5章は、ルクセンブルク語の共時的な音韻規則についての考察である。取り上げているのは、いわゆる「アイフェル規則」(dt. Eifler Regel) として知られる「n 規則」すなわち「n の脱落」、「人称代名詞間の歯茎鼻音 [n] の挿入」、「前置詞の直後の無声歯茎閉鎖音 [t] の挿入」、その他の現象である。なかでも、「前置詞の直後の無声歯茎閉鎖音 [t] の挿入」が後続する名詞句の韻律的な単位、音韻句 (engl. phonological phrase)、接語グループ (engl. clitic group) の開始部を際立たせる役割を果たしているという指摘は、示唆的である。また、その他の現象の中で取り上げているいわゆる「従属節内の挿入の „s“」(fr. „s“ intercalé) について、Schanen, François/Zimmer, Jaqui (2006a): 1, 2, 3, *Lëtzebuergesch Grammaire — 1 le groupe nominal* (Esch-sur-Alzette) がこれを音調上のリエゾン現象 (fr. liaison euphonique) とみなしているのにたいして、補文標識 (engl. complementizer) の屈折であるとする主張は、同書の誤解にたいする正当な指摘と言える。さらに、再音節化 (dt. Resilbifizierung) と子音の有声化についても、同書を改訂した Schanen, François/Zimmer, Jaqui (2012): *Lëtzebuergesch Grammaire luxembourgeoise* (Esch-Sur-Alzette) において、有声子音の前でも語末および形態素末の子音が有声化するとする説明を誤りであるとして、この現象が母音で始まる要素の前でのみ起こることをインフォーマント調査の結果から明らかにしている。

第6章は、ルクセンブルク語の通時的な音韻変化についての考察である。この章は、既存の研究を参照してまとめた解説部分を含んでいるが、独自の見解も見られる。たとえば、語末でのあいまい母音の脱落を上述の補文標識の屈折に関連づけた分析、舌端化 (dt. Koronalisierung) を上述の歯茎・硬口蓋摩擦音 /ε/, /z/ に関連づけた分析では、共時論的な音韻規則に歴史言語学視点から裏付けを与えている。とくに前者では、西出氏がルクセンブルクのテレビ番組に出演した際に、視聴者に向けて行った質問にたいする 105 人分の回答を資料としており、1 人称複数と 3 人称複数の屈折語尾 -en の残存についての統計的に貴重な報告となっている。さらに特筆すべきなのは、ライン高低アクセント (dt. Rheinischer Tonakzent) を扱っている点である。ゲルマン語では、北ゲルマン語に属するスウェーデン語とノルウェー語および両者の方言に、高低アクセントが存在することが広く知られている。一方、西ゲルマン語についても、ライン川流域のリプアリア方言 (dt. Ripuarisch) やルクセンブルク語が属するモーゼルフランケン方言 (dt. Moselfränkisch) にも高低アクセントが見られる。しかし、これは今日では失われつつあり、直接的に観察するのは容易ではなく、地域的にもきわめて限定されているために、十分に認知されていない。とくに日本のドイツ語研究では、紹介さえされていない。西出氏は研究文献を 20 世紀初頭から最新の成果に至るまで渉猟し、自ら現地に赴いて複数のインフォーマントにたいして調査を行い、音声解析の結果、高低アクセントの残存と考えられる声門閉鎖を検出するなど、独自の成果を収めている。